

1225 耳下腺部腫瘍のシンチグラムの検討

中沢 緑、白石友邦、播磨敬三、西山 豊、
上畠 博、長谷川武夫、小林昭智、田中敬正、
(関西医大、放)

Biopsy が種々の理由で望ましくないとされる耳下腺腫瘍に対し、術前の補助診断法としてのシンチグラムの有用性につき検討した。

対象は過去4年間当科にて扱った耳下部に腫瘤を有する患者85例で、唾液腺に生理的集積を有する ^{99m}Tc -pertechnetate と、腫瘍親和性核種である ^{67}Ga -citrate の両者によるシンチグラフィーを同一症例に施行した。①悪性腫瘍では ^{99m}Tc で欠損像(+), ^{67}Ga 集積(+), ②良性腫瘍では ^{99m}Tc 欠損(+), ^{67}Ga 集積(-), ③良性腫瘍+炎症では ^{99m}Tc 欠損(+), ^{67}Ga 集積(+), ④急性炎症では ^{99m}Tc 集積増加, ^{67}Ga 集積(+), ⑤慢性炎症では ^{99m}Tc 欠損(-), ^{67}Ga 集積(-)の傾向を示した。術前診断の主目的である腫瘍の悪性判定を ^{67}Ga 単独で行った場合、正診率は64%であったが、上記の5つの傾向を取り入れた ^{99m}Tc との組み合わせによる判定では、偽陽性であった炎症を除外でき、正診率は80%に向上した。耳下腺部腫瘍の診断のためには ^{99m}Tc と ^{67}Ga の集積像の組み合わせによる判定法が正診率を高めることができると考える。

1226 原発性肺癌における ^{201}Tl シンチの検討

平山二郎、金井久容、藤井忠重、草間昌三(信大
一内)、矢野今朝人、滝沢正臣(信大 中放)

肺癌56例につき ^{201}Tl シンチを施行した。原発巣への ^{201}Tl 集積の陽性率は51/56(91.1%)であり、組織型別では扁平上皮癌29/33(87.9%)、腺癌13/13(100%)、小細胞癌6/6(100%)、大細胞癌2/2(100%)であった。肺癌学会によるX線病型との関係では、肺野および肺門の腫瘤型、無気肺型、撒布型で強く集積する傾向を認めた。X線上の腫瘍径との関係では、径が大きい程強く描出される傾向にあったが、径2cm以下の陰影は描出されなかった。R-Iアンジオによる気管支動脈血流量との関係では、 ^{201}Tl 集積度の強い例ほど血流量の多い傾向を認めた。リンパ節転移巣に関して、 ^{201}Tl および胸部X線によるNファクターの診断を対比すると、両者の一致率は42/56(75.0%)であり、後者でN₁と診断された7例が前者ではN₂であった。 ^{201}Tl シンチでは心膜液貯溜、肺うっ血、右室負荷などの診断、さらにその動態像により上大静脈症候群の副側路の診断など血行動態の観察が可能であった。また、心、甲状腺が描出されるため、病巣の部位診断が容易であった。以上、 ^{201}Tl シンチは、原発性肺癌に高率に集積し、腫瘍シンチとして有用であり、また、同時に心血管系の情報も把握出来るという特徴を持つ。

1227 原発性肺癌における ^{67}Ga , ^{201}Tl スキャンの検討

戸川貴史、木田利之(福島医大、放)

組織型の確定した原発性肺癌15例について、 ^{67}Ga , ^{201}Tl 両スキャンを行い比較検討を行った。組織型別の内訳は、腺癌6例、扁平上皮癌5例、小細胞癌2例、大細胞癌1例、巨細胞癌1例であった。又、X線所見を腫瘤型(T)と浸潤型(I)の2型に分けるとT型12例、I型3例であった。 ^{67}Ga , ^{201}Tl スキャンの判定はいずれもその集積程度により(-), (+), (++)の3段階に分類し、(+), (++)を陽性とした。腺癌6例では ^{67}Ga (+), ^{201}Tl (++)群1例、 ^{67}Ga (+), ^{201}Tl (+)群3例、 ^{67}Ga (++), ^{201}Tl (+)群2例であったが、扁平上皮癌5例では ^{67}Ga (++), ^{201}Tl (+)群4例、 ^{67}Ga (+), ^{201}Tl (-)群1例と集積度はすべて ^{67}Ga が優れていた。小細胞癌の2例はいずれも ^{67}Ga (++), ^{201}Tl (+)群で ^{67}Ga 優位であった。巨細胞癌の1例は ^{67}Ga (-), ^{201}Tl (+)と ^{201}Tl 優位であったが、大細胞癌の1例は ^{67}Ga (++), ^{201}Tl (+)と ^{67}Ga 優位であった。又、X線分類でT型の12例について腫瘍の大きさと、 ^{67}Ga , ^{201}Tl の集積度を検討したが相関は認められなかった。15例中6例は放射線治療、化学療法開始後にスキャンを行っており、これらの ^{67}Ga , ^{201}Tl 集積度への影響についても検討した。

1228 ガリウムシンチグラフィーにおける肺

門部集積の検討。

久保田 恒、駒谷昭夫、山口昂一(山形大、
放)

ガリウムシンチグラフィーは、悪性腫瘍の原発巣ばかりでなく転移巣の検索にもしばしば用いられているが、肺門部にガリウムの集積を認めることは少なくない。昭和51年10月から昭和55年11月までの4年1箇月間に、ガリウムシンチグラフィーで肺門部集積を認めたものは128例あったが、そのうち肺癌、悪性リンパ腫、サルコイドーシス、肺炎など肺門部集積の原因となりうる疾患を除いた57例について、肺門部リンパ節転移との関連を検討した。

57例中40例は肺以外の悪性腫瘍があり、17例は良性腫瘍あるいは良性疾患であった。いずれも胸部X線写真上、肺門部リンパ節の腫大は認められなかった。また悪性腫瘍の40例中6箇月以上経過観察できたものは20例あったが、いずれも肺門部リンパ節腫大を来たして来たものはなかった。胸部X線写真上で肺門に異常がなければ、肺門部のガリウム集積は、false positiveの方が多いと考えられる。